

道元^{どうげん}禅師は、四^し摂^{しょう}法^{ぼう}という「菩薩^{ぼさつ}が行う、生きとし生けるもののための四つの行い」として、布施^{ふせ}、愛語^{あいご}、利行^{りぎょう}を挙げ、最後に、同じ事^{どうじ}と書く「同事」の行いを説いています。「同事」とは、自^じと他^た、すなわち、自分^{ほか}と他の人^あとが分け隔て無く共に在るといことです。

「同事」の行いは、簡単なことではありません。どのようにしたら、自分^{ほか}と他の人とが分け隔て無く共に在ることができるのでしょうか？

人と人が向き合えば、気持ちの押し付け合いもあるでしょう。売り言葉に買い言葉といいますが、大人どうしても、顔を向き合って話し合いをしているうちに、いつの間にか口論になってしまうような場面は、日常でよく目にする光景です。口論で相手に自分の気持ちをわかってもらおうと思えば、相手も同じように考えているのですから、互いに気持ちを押しつけ合えば、共に在るといことは実現しません。

それでは、どのように「同事」がなされるのでしょうか？

道元禅師は、「同事」について「他^たをして自^じに同^{どう}ぜしめて、後^{のち}に自^じをして他^たに同^{どう}ぜしむる道理あるべし」と説かれています。相手と自分の違いを探し、奪^{むす}ったり、押しつけあったりするのはなく、自^{みずか}ら進んで、相手を今、そのままの姿で受け入れることにより、自分と共に同じく在ることを実現しようとするのです。

曹洞宗^{とな}で唱えられる「梅花^{ばいかりゅうえい}流詠^{さんか}讚歌」の中に、『四^し摂^{しょう}法^{ぼう}御和讚^{ごわさん}』があります。

その中で、「同事^{どうじ}」の行いについて、

「隔^{へだ}ての心^{こころ}なきゆえに 流水^{ながれ}の海^{うみ}に入る^いに似^にて

ともに生^いきんと相^{あい}集^{いっど}い 励^{はげ}まし暮^くらす爽^{さわ}やかさ」と詠^{うた}われています。

私たちは海であり、同時に、流れ入る水の一^{ひとしずく}滴^{ひとしずく}に喩えられています。流れ入る水が海と出会う時、既に海の中に受け止められていることに気がつきます。

私たちは、一人一人の違いを気にすること無く、隔たりのない心で受け止めることができるのです。このように、「同事」の行いは、私たち一人一人が皆、共に生きる道筋を示してくれるのです。